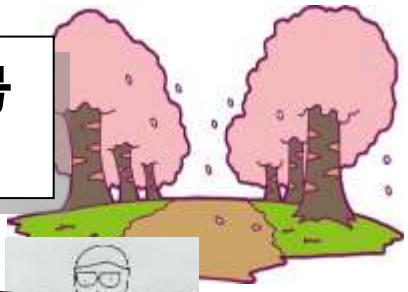
平成 31 年度 月刊 校長通信１号

（生徒・保護者版）　H31.4.24（４月号）



俊英NOW

●新任の先生方９名

よろしく
お願いします。

●スキー部の活躍

・渡邉愛蓮さん(1-6)中学時代､回転競技全国４位の活躍。
　入学早々､4/14 カナダの国際大会に出場しました。
・秋田県八幡台スキー場の全国大会（4/13）にて
　女子回転　小林ひかりさん(1-6) １位
　　保坂　花　さん(1-6) ２位
　男子回転　舟本 新大 くん(2-6) １位
　などなど、スキー部の皆さんの今後のさらなる活躍に期待します。

●ゴルフ部への練習用具贈呈

県内のゴルフ競技活性化を目指す「長野県ゴルフ基金」から、設立間もない本校ゴルフ部に、練習用ゲージ・マット３セットが贈呈されました。４月 11 日、贈呈式が行われ、柄沢洋一専務理事から中井大貴部長(2-6)へ目録が渡されました。中井君は「これまでは校内でボールを打つ練習はできなかった。結果で恩返ししたい。」と感謝を述べました。

校長ESSAY

酢は甘い？それとも苦い？

日光東照宮の陽明門は、びっしりと細かい彫刻で覆われています。下の写真は、その彫刻の一つです。三人の人物が甕を囲んで中のものをなめている様子。日光に旅行した時、この彫刻が何なのか、思い当たることがあって感動し、写真に撮ってきました。

この甕を取り囲んでいるのは、孔子、釈迦、老子の三人です。そして甕には酢が入っていて三人がそれをなめています。これは中国宋代にできた伝説らしいのですが、この話しが明治の文化人岡倉天心の『茶の本』という著作に紹介されていて、たまたま私はそれを読んで知っていました。『茶の本』は、原題を“The Book of Tea”といい、岡倉天心が茶道などの日本文化を外国に紹介するために英語で書いた本で、逆に日本語に翻訳され岩波文庫に収められています。

ある時、孔子と釈迦と老子が酢をなめました。孔子は、もちろん「すっぱい。」と言ったのですが、なんと釈迦は「苦い。」と言い、老子は「甘い。」と言ったそうです。奇妙な話ですが、よく考えてみると東洋の三大思想が見事に要約されています。

儒教の創始者孔子は、迷信を嫌った合理主義者で、冷静に社会を分析し、秩序の回復を目指しました。だからすっぱい酢は、孔子にとって当然ながらすっぱいのです。仏教の創始者釈迦は、人々を苦しみから救おうとしました。釈迦は、現世を苦しみに満ちた世界と捉えた悲観主義者でした。だから酢は、釈迦にとっては苦いのです。道教の創始者老子は、自然の根源を「無」であると考えました。「無」はすべての「有」の前提です。例えば一本のチョークだってまわりがチョークで「無」いからチョークで「有」ることができるのです。老子はこの「無」にすべてをゆだねて生きることを教えました。これは、すべてをあるがままに受け止め、心安らかに生きることにつながっていきました。まさに究極の楽天主義です。だから酢は、老子にとっては甘いのです。

さて、このお話を知らなければ、私は陽明門のこの彫刻に関心を持つことはなかったでしょう。知っていたからこそ、この彫刻に注目することができたのです。日光東照宮陽明門を埋め尽くすその他の彫刻も、何かいろいろな内容を表現しているに違いありませんが、私はそれを知りません。知らないとすれば、残念ながらそれで話はおしまいです。「知っている」ということの「すごさ」はここにあります。つまり、知っていなければ世界が広がっていかないということです。そして、知るためには学ばなければなりません。

生徒の皆さんは、長野俊英高校で多くのことを学んでいます。その直接の目的は、目前の進路希望実現ですが、それとともに、自らの力で物事を理解して判断し、より良く生きていくために私たちは学んでいるのです。こうした学びの原点をもう一度見つめ直すことで新しい世界が広がっていくはずです。皆さんの主体的な学びに期待しています